

「イスカリオテのユダ」についての一考察

渋澤 一郎

1. はじめに
2. 十二使徒の選任における「イスカリオテのユダ」
3. 福音書以外の新約聖書における「イスカリオテのユダ」
4. 「イスカリオテのユダ」とはどういう人物か
5. ユダの裏切りまで
6. ユダの「裏切り」(引き渡し)について
7. ユダの裏切りの理由
8. イエスはユダをどう見ていたのか
9. ユダの死
10. ユダとは何者なのか
11. 終わりに

1. はじめに

「イスカリオテのユダ」(以下「ユダ」とも記す)。キリスト教に関わる者にとってこの名前は常に複雑な感情を持って受け止められている。なぜならば、ユダはイエス・キリストを裏切った弟子だからである。ユダは間違いなくイエス・キリストの弟子であった。しかも、イエス自身が選んだ弟子であった。ヨハネ福音書6章70節において、イエスは弟子たちに対して、「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか」と言っている。

自分が選んだその弟子の一人にイエスは裏切られたのである。イエスは裏切りを承知でユダを選ばれたのか。あるいは彼の選びには別に何か意図があったのか。ユダはキリスト教会の汚点なのか。ユダの裏切りがなければイエスの生涯はどうなっていたのか。これらの問いは新約聖書における永遠の謎である。

ここでは福音書に描かれたユダを見ることを通して、新約聖書記者がどのようにユダを捉えていたのか、また、イエスはユダをどう見ていたのかということ考察しつつ、新約聖書におけるユダの存在意味について考えて見たい。

2. 十二使徒の選任における「イスカリオテのユダ」

新約聖書によれば、「イスカリオテのユダ」はイエス・キリストの十二弟子(使徒)の一人に数えられている。しかも、イエス自身が選んだ弟子であった。マルコ福音書によると、彼らはイエスが「これと思う人々」(3:13)であり、彼らを「使徒」(遣わされた者の意)と名付けたのは「彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教をさせ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった」(3:14~15)。

だから、イスカリオテのユダも間違いなく、他の使徒たちと同様に、イエスのそばにおり、派遣されて宣教し、悪霊を追い出しなのである。マルコ福音書6章12節以下には、「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒した」とある。この十二人からユダを除外する理由はないだろう。彼は間違いなくイエスの直弟子であり、イエスの最も近くにおり、イエスの命ずる働きに参加していたのである。しかしながら、福音書におけるユダはイエスを裏切った人物なのである。

共観福音書（マタイ、マルコ、ルカの三福音書を通常こう呼ぶ）における十二弟子選任の記事においてはそれぞれ次のように記されている。

マタイによる福音書

「それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。」（10：4）

マルコによる福音書

「それに、イスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。」（3：19）

ルカによる福音書

「それに後に裏切り者となったイスカリオテのユダである。」（6：16）

ヨハネによる福音書には弟子の選任の記事はないが、ユダの扱いは共観福音書と同じである。6章71節には「このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた」とある。このように、すべての福音書においてイスカリオテのユダはイエスを裏切った弟子とされているのである。

イエスへの裏切りに関連する箇所を除いた福音書の他の箇所に、直接ユダが言及されているのはヨハネ福音書12章1節以下の記述だけである。ここでは、ベタニアのマリアが高価なナルドの香油をイエスの足に塗った時、ユダが「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」とこの女を非難している。ヨハネはユダの非難を「彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心に掛けていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっているながら、その中身をごまかしていたからである」（12：6）と説明している。

3. 福音書以外の新約聖書における「イスカリオテのユダ」

では、福音書以外の新約聖書においてユダはどのように記されているのか。福音書以外で直接ユダについて言及されているのは使徒言行録だけである。使徒言行録1章16節以下には次のように記されている。

「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は実現しなければならなかったのです。ユダはわ

たしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。ところでこのユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の地所』と呼ばれるようになりました。」

この箇所は、ユダの後任の使徒を選ぶ時のペテロの言葉として記されているが、ここからもユダが「イエスを捕らえた者たちの手引きをした」とあり、ユダがイエスを裏切ったことが認められる。

パウロの手紙には直接的にはユダについては言及されていない。ただし、間接的ではあるが、コリントの信徒への手紙一 15章5節にはイエスが復活した後、「ケファに現れ、その後、12人に現れた」とパウロは書いており、イエスの復活の時点ではユダは既に弟子たちの中からは脱落しているにも関わらず、あたかも弟子の中にとどまっているかのように記されている。この事実はおそらく、パウロが復活の顕現伝承をそのまま用いているからであると説明できるであろう。パウロにとってキリストの復活の事実の前では、12の中にユダが含まれているのかどうかと言う詮索はあまり意味を持たないものであったのであろう。

その他の新約聖書の文書においてもイスカリオテのユダについては一切言及されていない。

以上のように、福音書においても他の新約聖書においても、ユダが言及される場所では、彼はイエスを裏切った弟子という位置付けが明確になされているのである。

4. 「イスカリオテのユダ」とはどういう人物か

では、イスカリオテのユダとはどんな人物だったのか。これは福音書以外にほとんど資料がないので、福音書から推測するしかない。

「イスカリオテ」は、いくつかの解釈がなされているが、一つは「カリオテ（町の名）出身の」と言う意味である。ただ、「カリオテ」が具体的にどこを指すのかは不明である。二つ目は、地名とは別に、当時、政治的に過激派グループであった「シ

カリ（短剣の意）派」に起源を持つとする解釈もある。それに従えば、ユダは、丁度、十二使徒の一人で「熱心党」（これも当時の過激派の一派）と呼ばれたシモンと同様に、過激派出身の弟子であったという解釈も出来るのである。三つ目は、アラム語の「詐欺師」に由来するという説である。

しかし、いずれにしても、それらはユダの出身を明らかにする上での決定的な決め手とはなっていない。

また、ヨハネ福音書には「イスカリオテのシモンの子ユダ」（6：71）とあるので、父親の名はシモンであったと推測される。「ユダ」という名が示すとおり、彼はイスラエルの十二部族の中の「ユダ族」に属しており、イエスの弟子の中で唯一のイスラエル南部出身者であった。出身地の違いがイエスの裏切りの動機となったかどうかは不明であるが、興味のあるところではある。

いずれにしても、ユダについての人となりについては福音書からはそれ以上のことはわからない。

5. ユダの裏切りまで

ユダはなぜイエスを裏切るに至ったのか。福音書からその経過を見てみたい。共観福音書では、イエスは弟子たちに自分の死を三度予告している。しかし、その死の原因がユダに起因するということはその時点では語られていない。

ユダがイエスへの裏切りを開始するのは、共観福音書においては、イエスが弟子たちと最後の食事に行く直前のこととされている。福音書を見よう。

マタイによる福音書（26：14－16）

そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。そのときから、ユダはイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。

マルコによる福音書（14：10－11）

十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長のところへ出かけて行った。彼らはそれを聞いて喜び、金を

与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

ルカによる福音書（22：3－6）

しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけた。彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。

福音書において、このイエスと弟子たちとの最後の食事（過越の食事）以前には、ユダがイエスを裏切ろうとする兆候は記されておらず、ここに至り、突如として、ユダがイエスを裏切るという記事が現れる。ユダが自分の意思においてユダヤ教の指導者たちのところへ行きイエスを引き渡すことを申し出ている。そして、いずれも彼らがユダに金を与える約束をしている。マタイとヨハネでは、ユダが金のためにイエスを引き渡そうとしたことが推測されるが、他の福音書では理由は不明である。

共観福音書に対して、ヨハネ福音書では事情が少し異なる。ヨハネ福音書は共観福音書とは福音書の構成が基本的に異なるため、単純に比較することは出来ないが、福音書の比較的早い段階でユダの裏切りについて記している。

イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。

（ヨハネ6：64）

すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。
（同6：70－71）

このように、ヨハネによれば、イエスは「最初から」ユダの裏切りについて知っていたことになる。更に、「過越祭（すぎこしさい）」の前の夕食の時に、「既に、悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。」とある（ヨハネ13：2）。

さて、イエスはそれまで自分を裏切るものについては沈黙していたが、「過越の食事」の中で公然と自分を裏切る者について言及している。共観福音書、ヨハネ福音書に従って見てみよう。

マタイによる福音書

「はっきり言っておくが、あなたがたのうち一人が私を裏切ろうとしている。」(26:21)

「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸したものが、わたしを裏切る。」(26:23)

イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、「先生、まさか私のことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」(26:25)

マルコによる福音書

「はっきり言っておくが、あなたがたのうち一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」(14:18)

「十二人のうち一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。」(14:20)

ルカによる福音書

「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。」(22:21)

ヨハネによる福音書

「はっきり言っておく。あなたがたのうち一人が私を裏切ろうとしている。」(13:21)

イエスは、「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった。(13:26-27)

ここに至り、イエスははっきりとユダが自分を裏切ることを明言される。イエスはどの時点でユダの裏切りに気付いたのかということは、ヨハネ福音書を別にしてはわからない。

ユダを除いた弟子たちにはイエスの言う意味がわからない。それどころか、弟子たちは「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた(マルコ14:19)。このことは弟子の誰もがイエスを裏切る可能性を秘めていたということを示唆しているようにも思える。

6. ユダの「裏切り」(引き渡し)について

さて、イエスへの裏切りを決意したユダは、いつイエスと他の弟子たちの元を離れてイエスを売

りに行ったのか、福音書では明確ではないが、ヨハネ福音書によれば、「パン切れを受け取ると、すぐ出て行った」(13:30)とある。ユダは過越の食事の後、ただちにイエスを裏切るためにユダヤ教の指導者たちのところへ出向いたのであろう。そして、ユダはイエスを彼らに引き渡すために再びイエスのところへ戻ってくるのである。ユダの引き渡しを福音書に従って見てみたい。

マタイによる福音書 (26:47-50)

イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言って接吻した。イエスは、「友よ、しようとしていることをするがよい」と言われた。すると、人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。

マルコによる福音書 (14:43-46)

さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と前もって合図を決めていた。ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

ルカによる福音書 (22:47-48)

イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻しようと近づいた。イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。

ヨハネによる福音書 (18:3-6)

それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやって来た。松明やともし火や武器を手にしていた。イエスのご自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進

み出て、「誰を捜しているのか」と言われた。彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。

このように、イエスはユダの裏切りによって逮捕される。ユダの裏切りとは何であったのか。具体的にはイエスを人々に「引き渡す」ということであった。イエスを捕らえようとする人々の手引きをしてイスエの元に来、接吻でどれがイエスであるかを示し、人々がイエスを捕らえやすいようにすることであった。

ここで注目したいのは、ユダの裏切りで使われている「裏切る」という言葉はギリシア語の「*παράδιδωμι*」(パラディドーミ)である。このパラディドーミはもともと、「裏切る」というような強い意味ではなく、「引き渡す」とか「委ねる」「(教えや言い伝えを) 伝える」という意味である。福音書ではこのパラディドーミが、「裏切る」と「引き渡す」の両方に訳されている。例えば、マタイ福音書26章16節には、「ユダはイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた」(傍線筆者)とあるが、この場合には「*παράδω*」という語が用いられ、これはパラディドーミの接続法第二不定過去形の三人称単数である。これに対して、同福音書26章25節の「イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで」(傍線筆者)の場合は「*παράδιδούς*」が用いられおり、これはパラディドーミの男性名詞の現在分詞形である。両方とも同じパラディドーミが用いられているが、このように異なった訳になっている。

しかしながら、福音書は一貫して、ユダの裏切りについては本来「引き渡す」という意味で用いられるパラディドーミを使用していることは興味深いことである。ユダの行為は確かに、彼がイエスに最も近い弟子でありながらイエスを金で売ったということから言えば裏切り行為ではある。しかし、その行為自体はただ単にイエスを人々に「引き渡す」という行為でしかないとも言えるのである。ユダ自身がイエスを捕らえたり、傷つけたり、ましてや殺したりというのではなく、人々をイエスの元に連れて来る事によってイエスを

「引き渡すこと」、それがユダの裏切りであったのだ。その行為自体は何もわざわざユダがしなくても良いような行為である。なぜならば、ユダが手引きをしなくても、イエスがルカ福音書22章53節で言っているように、イエスは毎日神殿の境内にいたのであるから、誰もがイエスの顔は知っていたはずである。イエスを捕らえようとしたかかったら、簡単にそれが出来たはずだからである。一歩引いて、イエスは群衆に人気があったので、昼間ではなく夜密かにイエスを捕らえねばならず、そのためには暗闇の中でも確実にイエスを捕らえるために、イエスを良く知ったものが手引きをする必要があったと想定しても、なぜそれが十二使徒の一人でなければならなかったのかという疑問は残る。

7. ユダの裏切りの理由

マタイ福音書26章15節は金のためにユダはイエスを裏切ったと記している。そして、祭司長たちは銀貨30枚を裏切りの代償として彼に与える約束をしている。しかし、銀貨30枚という具体的な数字はマタイだけである。銀貨30枚は当時奴隷一人の値段であったと言われているが、ユダが金目当てであったとしたらイエスを裏切るのに奴隷一人の値では少し少ないのではないかという気もする。

ルカ福音書とヨハネ福音書はサタンがユダに入った結果だと言っている。つまり、悪魔がユダに入り裏切りを起こさせたというわけである。このことは、そうとしか説明できない、理解不可能な出来事であったという事を意味しているとも言えないだろうか。

マルコ福音書は単に「イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った」と記すのみである。なぜ引き渡そうとしたのかについては沈黙している。

このように、福音書もユダの裏切りについては共通した見解を述べるには至っていない。つまり不明だということである。

ユダの裏切りについては様々な推測がなされているが、福音書以外にはユダについての資料は乏しく、やはり我々は福音書からしか彼の裏切りを判断するしかない。その時に、福音書記者が十分

にユダの裏切りの理由については述べる事が出来ないように、やはり我々にもその理由は依然として謎と言わねばならない。

8. イエスはユダをどう見ていたのか

イエスはユダをどう見ていたのだろうか。福音書から考えてみたい。福音書に共通しているのは、イエスが十二人の弟子を自らの意思で選んでいるということである。しかも、彼らに「使徒」という特別な名さえも与えている。この時点でユダがイエスを裏切るという兆候は見られない。また、イエスもユダをそのようなものとしては見ていなかったのではないかと推測される。ヨハネ福音書では「イエスは最初から 御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである」(6:64)とあるが、ヨハネ福音書よりも早く書かれた共観福音書はそのことには一言も触れていないので、この言葉はヨハネの編集句と見るほうが妥当ではないか。

いずれにしても、イエスと弟子たちの活動の初期の段階においてはユダがイエスを裏切るということは予測されておらず、イエスもユダをそのような存在として見ているということとは言えない。更に進んで、福音書の間におけるイエスの受難予告においても、イエスは自分の受難については語るが、それがユダによって引き起こされるということには何も言及していない。しかし、弟子たちとの最後の食事に至って、突如イエスは自分を裏切るものが弟子たちの中におり、「人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった」(マタイ26:24、マルコ14:21)「人の子を裏切るその者は不幸だ」(ルカ22:22)「その中の一人は悪魔だ」(ヨハネ6:70)と言っている。イエスがどの時点でユダの裏切りに気が付いたのかそれは不明であるが、最後の晩餐においては、ユダが生まれてこなかったほうが良かったとまでイエスは言い切っている。これは、ユダへの呪いの言葉なのか。それとも、神の子・メシアを裏切らなければならないユダへの憐れみの言葉なのか。いずれにしてもイエスの心情が吐露された言葉であろう。

イエスはなぜユダを使徒に選んだのか。ヨハネ福音書が言うように、ユダがイエスを裏切ることを

を最初から知っていてユダを選んだのだとしたら、むしろユダは犠牲者ではないのか。彼に罪はないのではないのか。だが、イエスは最初からユダが裏切ると知っていて彼を弟子に選んだのではないだろう。ユダがイエスの弟子に適任であると判断し、自分の片腕として用いるために、彼を十二人の一人として選んだのである。それが、ある時、自分をユダヤ教の指導者たちに引き渡そう(裏切ろう)としていることに気が付いたのである。それが真実なのではないだろうか。そして、イエスはその裏切りを自らの身に引き受けるのである。イエスはユダの裏切りを止めようとはしない。むしろ、「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」(ヨハネ13:27)とユダに言うのである。

9. ユダの死

ユダの死を報告しているのはマタイ福音書と使徒言行録だけである。マタイ以外の福音書はユダがイエスを裏切った記事を最後に、それであたかも彼の仕事が終わったかのごとく、ユダは姿を消している。マタイ以外の福音書記者はユダの死には関心がないようである。とはいえ、使徒言行録は福音記者ルカが記したものと考えられているので、ルカは福音書にはユダの死については記さなかったが、使徒言行録でそれに触れていると言える。

マタイはユダの死を次のように記している。

そのころ、イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言った。しかし彼らは、「我々の知ったことではない。お前の問題だ」と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ。

(27:3-6)

マタイによればユダはイエスを裏切ったことを後悔して自殺したことになっている。金のためにイエスを引き渡したユダが、そのことを後悔して自殺するというのはあまり説得力がないように思える。福音書ではマタイにしか裏切り後のユダについて記されていないということは、その後のユダの行方が不明であることを示唆してはいないだ

ろうか。あるいは、それ以上に、イエスの十字架と復活という出来事の前にはユダの裏切りをそれ以上追及する必要を全く認めていないということでもあるように思える。

しかし、使徒言行録で再びユダのその後を垣間見ることが出来る。使徒言行録にはユダの死について次のように記されている。

そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた。「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は実現しなければならなかったのです。ユダはわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。

(1 : 15 - 18)

この記事を見る限りユダが自殺したとは必ずしも言えない。彼はイエスを裏切った報酬で土地を買い、何らかの不慮の事故によってその土地に転落して死んでしまったと読めるのである。いずれにしても使徒言行録が伝えるユダの死は自殺ではなく、何らかの事故のようであり、しかも、その死の時期はマタイがイエスの死の前であるとしているのに対して、イエスの死後の可能性が極めて強いことが分かる。

このように、ユダの死についてはマタイも使徒言行録も異なった理解(伝承)を持っているので、その死もまた謎に満ちていると言わざるを得ない。

10. ユダとは何者なのか

ユダはイエスを裏切る(引き渡す)という一点において福音書にその位置を占めている。あたかもそれは予め決められていたかのごとくである。四福音書すべてが彼をイエスを裏切ったと人物として包み隠さず開示しているのは不思議なことである。身内の恥を隠すことなく、自分たちの仲間、しかも、イエスに最も近い弟子、イエスがこれと認めて選んだ弟子の中にイエスへの裏切り者を求めるのは、それがまさにユダの使徒としての役割であったとでも言いたかったのであろうか。

イエスは自分の受難を予告し、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される」(マルコ 9 : 31等)と予告しているが、この予告が実現するためには「引き渡す者」がいなければならないのである。ユダの裏切りの真の理由は不明であるが、彼がイエスを引き渡したことは紛れもない事実なのである。もしユダが裏切り者でなく、よそに犯人がいるとしたら、福音書はその人物をイエスから出来るだけ遠い存在にしたことであろう。なぜならば、教祖を裏切った人物がその最も近くにいたとあっては、当時新興宗教であったキリスト教会の評判を落とすことがあっても高めはしないからである。

しかし、福音書は最も近くに裏切り者がいることを隠さない。それは、イエス裏切りの全責任をユダに負わせようという意図なのか。他の弟子たちにもイエスに死刑の判決を下したユダヤの総督、ポンティオ・ピラトにもイエスの死には何ら責任がないのだということを言いたいのであろうか。それは定かではない。しかし、それらの理由を考慮したとしても、ユダが福音書においては特別の極悪人とも、あるいは、反対にイエスの死に消極的な罪しか見いだせないとも言われてはいない。福音書は明確に「イスカリオテのユダ、このユダがイエスを裏切ったのである」と言うだけである。イエスの引き渡しの罪がユダにあることを事実として述べているのである。

イエスを裏切ったと言えば、ペトロをはじめとする他の弟子たちも同様である。ペトロはイエスを知らないと三度も否定したし、その他の弟子たちはイエスが逮捕された時、蜘蛛の子を散らすようにイエスを見捨てて逃げ去ってしまった。しかし、彼らはイエスを「引き渡す」という裏切りは犯してはいない。彼らの裏切りは消極的なそれとでもいえばいいだろう。しかも、彼らの消極的裏切りもユダの積極的・直接的裏切り(引き渡し)から派生しているのである。その意味でユダはやはりイエスを裏切った者の筆頭に位置しているのである。

確かに、彼の引き渡しから、イエスの逮捕、他の弟子たちの逃避、イエスの裁判、死刑の判決、十字架上での苦しみ、そして死へと一連の受難が続いていくのである。すべての発端はユダにある。その罪は免れ得ないであろう。

しかし、福音書が冷静にユダの裏切りを述べる背景には、彼の罪にもかかわらず、神の計画は進んでいくということを言いたいのではないであろうか。彼の裏切りにもかかわらず、しかも、彼の裏切りをも包み込みながら、神の業は貫徹されていくのである。だからこそ、イエスはユダの裏切りを止めることなく、また、そこから逃げることもなく神の業の中に自らを置き、神の意志のままに行動されるのである。その神の業という範疇の中でユダの使徒としての存在も考えていかなければならないのではないだろうか。少なくとも、福音書はそのようにしてユダとユダの裏切りとを捉えているように思える。

11. 終わりに

非常に粗雑ではあるが、福音書におけるイスカリオテのユダを見てきた。彼は依然として謎の人物ではあるが、必要以上に彼について詮索することは福音書の求めていることではないだろう。彼の裏切りは確かにイエスの生涯の中で重要な位置を占めていることは間違いない。しかし、ユダの

裏切りはイエスの死の中心にはない。あくまでその一部分でしかない。ユダの裏切りにもかかわらず、いや、その裏切りをあたかも肯定するがごとく、イエスは神の意志へと全く従順であった。そこに何らユダの入り込む余地はない。ユダの裏切りによって変えられるべき何もものもないのである。

パウロはフィリピの信徒への手紙の中で、キリストは「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（2：8）と書いているが、キリストの神への従順こそがユダの裏切りにおいても強調されなければならないことである。キリストの受難と死の前にはユダの裏切りはすでに意味をなさないのである。ユダが裏切ったその時から、彼の裏切りはイスエの従順へと飲み込まれてしまっているのである。それゆえに、イエスの十字架においては、ユダはその役割を終え、福音書の舞台から引き下がっているのである。ユダの存在がなかったらイエスの生涯はどうなっていたのか、福音書はどうなっていたのか。興味は尽きないが、やはりそれは依然として謎のままである。